



かたつきちゃいれ おおしま
肩衝茶入 銘 大嶋

瀬戸(愛知県) 室町~桃山時代(16世紀)

高11.9 胴径8.4 口径4.0 底径4.8(cm)

◆◆館蔵品紹介◆◆

「肩衝茶入 銘 大嶋」(以下「大嶋」と省略)は、愛知県の瀬戸窯周辺で焼かれた茶入である。瀬戸は鎌倉時代より中国の製陶技術を導入したと伝えられており、灰釉や鉄釉を用いた製品を生産する日本窯業の先進地であった。特に中国陶磁器の模倣を得意とし、喫茶に用いる天目、そして茶入などを生産してきた。やがて16世紀に名物茶入の選定が進むと、その動きを反映した瀬戸の作品からも、「名物」に数えられる名品が登場してくる。まさに「大嶋」も、そんな瀬戸茶入の重要作例の一つである。

「大嶋」は茶入の中でも「肩衝」、すなわち縦長で、肩を鋭角に衝いた形状をしている。室町時代に高く評価されていた「茄子」「文琳」^{なすび ぶんりん}に対し、肩衝が人気を博すようになったのは戦国時代から桃山時代のこととされ、

瀬戸でも一時期下火となっていた肩衝の制作が再開する。

「大嶋」はやや白味を帯びた緻密な胎土を用いており、胴は中央のやや上でもっとも大きく膨らみ、胴は轆轤目^{ろくろめ}を残して挽き上げている。かっちり^{かちり}と衝いた肩から頸にかけてはやや窪み、その頸が力強く立伸びることで、全体で力強い印象を生んでいる。裾までかけられた釉薬は、茶褐色の上に黒い斑を生じさせ、全体に紫色を帯びている。この釉薬は内側では口元で止まり、胎土が露出している。胴の中央のやや下で一条の沈線を一周させ、底部は目の細かい糸切りとする(挿図1)。

特異なのはその大きさであり、高さは約12cmとなっている。唐物の肩衝茶入は10cmを超えることがないので、戦国時代の茶人たちの嗜好が生み出した、新しい造型であったと位置付けられるだろう。



挿図1 大嶋肩衝 底面

・大瀬戸とその伝来について

瀬戸の茶入の中でも、戦国時代までに制作された古い作品群は「古瀬戸」と呼ばれている(古い瀬戸製品全般を指す「古瀬戸」は近代の呼称である)。さらに古瀬戸茶入の中でも細工の小形のものを「小瀬戸」、そして大形のものを「大瀬戸」と呼びわけたとする。桃山時代には特に大瀬戸が唐物に準じる名品とされ、大名などの手に渡り、銘やその所有者の名を冠して文字通りの「名物」となっていた。

瀬戸茶入については、近年の窯跡の発掘調査や井上喜久男氏による研究により、制作年代についてかなりの情報が集まってきた。中でも昭和美術館で所蔵する「尻彫茶入 銘 伊予簾」、また遠山記念館で所蔵する「尻彫茶入 銘 松風」(挿図2)などは、瀬戸茶入でも極めて古い窖窯10期(推定1370~1400)の伝世品と確認される。二重掛けされた釉薬の生み出す景色や、胴を廻る沈線など、唐物茶入の本格的な模倣が進んでいたことが看取される。



挿図2 「尻彫茶入 銘 松風」遠山記念館蔵

他方で大瀬戸について、「肩衝茶入 銘 槍の鞘」(挿図13)などは16世紀末期と位置付けられているが、制作を行った窯跡が未発見のため、特定には至っていない。また所在不明の重要作例も多いため、高橋義雄(箒庵)が編纂した『大正名器鑑』には大瀬戸が多数掲載されていることから、その主だったものを掲載した(挿図10~17)。この一群の中に「大嶋」を位置づけると、胴の膨らみが中央部よりやや上で、また口作りがかっちりとし立ち伸びている点が特徴となる。『大正名器鑑』からこの特徴に近い作品を探すと、「肩衝茶入 銘 茶屋」(挿図10)が挙げられる。現在の所在は不明であるが、『大正名器鑑』の拝見記によれば、釉薬が紫色を呈している点、また口縁部の内側で釉薬が止まっている点なども「大嶋」と共通する。

この「大嶋」「茶屋」に対し、「槍の鞘」をはじめ「肩衝茶入 銘 長谷川」(挿図14)、「肩衝茶入 銘 平野」(畠山記念館蔵、挿図15)、「肩衝茶入 銘 生駒」(MIHOミュージアム蔵、挿図16)は、頸を低く捻り返し、胴の膨らみも下方に下げ、輻輳目も目立たせない。重心が安定し、また洗練された造型と呼んでよく、おそらく「大嶋」「茶屋」よりも時代の下る作だろう。「肩衝茶入 銘 本阿弥」(挿図11)、「肩衝茶入 銘 松前」(挿図12)が過渡期の制作で、やや小ぶりな「槍の鞘」が到達点という可能性がある。

この「槍の鞘」については、伏見奉行の石川貞清(?~1626)が豊臣秀吉から下賜されたという伝承がある。伏見奉行はこの場合、伏見城築城担当の意味だろう。貞清は実際、木曾の蔵入地代官として文禄4年(1595)に材木の調達と輸送を命じられている。翌5年に伏見城が一応の竣工に至るので、「槍の鞘」の伝承を信じると下賜されたのはこの年となり、制作年代の下限となる。

同様に「長谷川」は、秀吉に仕えた長谷川宗仁(1539~1606)が所持した茶入とされる。「平野」も河内国平野郷の商人である平野道是(生没年不詳)の所持と伝え、天正15年(1587)の北野大茶湯で用いられたとする。「生駒」についても、慶長17年(1612)に徳川家康から高松藩主の生駒正俊(1586~1621)へと下賜されたものである。このように所有者の人名を冠した銘が多く、いずれも秀吉、家康周辺の人物である。

特に「平野」が北野大茶湯で用いられたとすれば、秀吉が天下人となった天正年間に、畿内の茶人の間で使用され、相当の評価を得ていたことになる。また「槍の鞘」が制作年からあまり歳月を経ない時期に、秀吉が家臣への褒賞に用いられたとすれば、その制作に秀吉周辺の大名が関与した可能性も想定される。

・大島光義について

本作の銘の「大嶋」についても、漠然と所有者の名前であると考えられてきた。しかし明確な記録はなく、『大正名器鑑』では「大島某の所持せしものならん、其何人たるを知らず」とのみ記されている。そこで桃山時代に「大島」を名乗った人物を探すと、大島光義(1508～1604、挿図3)の名が見つかった。光義は美濃国関郡(岐阜県関市)出身とされる武将で、信長、秀吉、家康に仕え、特に信長から弓の腕を賞されて「雲八」の名を与えられた逸話で知られる。



挿図3 「大島光義像」大雲寺蔵

『寛政重修諸家譜』の大島氏の項を調べると、晩年の光義の事績として次の記述が見つかる。

これよりさき光義領地にありて(家康に)茶入をたてまつりしところ、のちまた光義にかへし賜はる。

これを信じれば、光義が家康に茶入を献上し、後に戻されたのであり、本作が該当する可能性が高い。「領地にありて」とあるが、京都にいた光義が秀吉から美濃に領地を拝領したのが慶長3年である。同年には秀吉が死去し、光義は家康へと接近していく。同5年の関ヶ原合戦の前には上杉征伐に同行し、小山(茨城県小山市)で転進して関ヶ原合戦に参加した。この時の褒賞として郷里である関郡を所望したと伝承されるが、関は刀剣の名産地という軍事的な要所である。ここを任されたのは、徳川家からの信用が厚かったことを示している。ここに関藩1万8000石が成立し、光義は大名となった。光義が家康に茶入を献上したのは、その御礼と解すべきである。

・大島光義と金森長近

では、光義はその茶入をどこから入手したのだろうか。これに関連して興味深いのは、光義が入った関郡に隣接する美濃国武儀郡(岐阜県美濃市)に、金森長近(1524～1608)が居たという事実である。長近も美濃出身で、信長と秀吉、家康に仕えたという、光義と極めて近い来歴の武将である。また千利休に学んだ茶人としても名高く、その孫の金森重近(宗和)は宗和流の一派を立て、野々村仁清を指導したことで知られる。

長近も光義と同様、家康の上杉征伐に同行して小山まで行っており、やはり家康に従って関ヶ原合戦に参加した。そしてこの前後の褒賞として、長近は武儀郡1万8000石を加増された。長近はすでに飛騨国高山(岐阜県高山市)に3万8000石を領していたが、同地は養子の可重に譲って隠居し、実子の長光と共に武儀郡に移る。そして同地に晩年の居城である小倉山城を築城するが、光義の関陣屋とは直線距離にして約7kmという地理関係なのである。

ここからは想像となるが、光義が関郡の領地を拝領した際、その返礼について近くにいた長近に相談し、「大嶋」が斡旋されたのではないだろうか。実際にこの前後、金森家が大名に茶入を譲渡したという事実がある。細川家の永青文庫で所蔵する「肩衝茶入 銘 出雲」は可重の旧蔵品で、その銘は可重の官位が出雲守であったことに由来する。これを細川忠興(三齋)が懇望して譲り受け、細川家の家宝としたのである。

また「出雲」は金森家が高山領内で茶入を捜索して見出したとされるが、細川家でもこれを真似て豊後領内を捜索したとされる。この時、家老の松井康之が差し出したのが「肩衝茶入 銘 山の井」(挿図17)である。その来歴については『松屋会記』寛永14年の記述で、康之の家臣である稲津忠兵衛が丹後国亀山(京都府亀岡市)の貧家でこがしを入れるのに用いていたものを70文で買い取ってきたと記される。しかし「山の井」は「槍の鞘」によく似た大瀬戸であり、当時はまだ骨董ではなく新品だったはずである。上記の伝承は、より古い時代のものに見せるため、脚色されたものだろう。

なお当時の大瀬戸の価値であるが、「長谷川」については、長谷川宗仁が幕府作事方大棟梁の甲良宗広(1574～1646)に譲渡した時に金250枚であったと伝えられる。また「茶屋」に関しては、茶屋宗古が小堀遠州より金500枚で買い取ったとも伝える。金1枚を50石と換算した場合、金250枚は1万2500石となり、光義の所領一年分の石高に近い。光義にとっても相当な出資だったはずであり、家康はそれを汲んで光義に茶入を返したと、

そのように想像される。

光義はその後、慶長9年に京都で亡くなり、関市の大雲寺に葬られた。領地は4人の息子に分与され、関藩は消滅して旗本領となっていく。光義の茶入も、息子のいずれかに継承されたはずであるが、徳川幕府旗本が家康からの拝領品を譲渡する可能性は想定できない。おそらく茶入は、元和元年(1615)の大坂夏の陣で豊臣方について没落したという、四男の光朝(?~1663)が所持していたのだろう。光朝は岡山藩池田家を頼って落ち延びるが、その前後に処分されたとすれば無理はない。

・藤堂家と徳川宗家

遠山記念館の「大嶋」に関する確かな記録として、『柳営道具帳』に次のように記されている。

元禄十六年未六月廿八日

一大島肩衝 金五百枚以上 藤堂伊賀守遺物
袋三 宗雪切 藤元切 白地金襴
蓋四枚

すなわち元禄16年(1703)に伊勢国津藩(三重県津市)の藤堂高陸たかちかが襲封した際、「大嶋」を將軍徳川綱吉へと献上している。この「大嶋」が光義の茶入とすれば、藤堂家に移動した年代が問題となる。これに関連して、『松屋会記』に興味深い記述がある。

一藤堂和泉守様、関才次の所ニ而、客ハ中坊左近様、久好二人

床ニ、ヲソ櫻肩衝・四聖坊肩衝・サイキ肩衝・上々瀬戸肩衝

肩衝四ツ銚テ御茶被下ル

文中の藤堂和泉守とは、津藩の祖である藤堂高虎を指す。「肩衝茶入 銘 遅桜」(三井記念美術館蔵)、「肩衝茶入 銘 佐伯」(寧楽美術館蔵)、「肩衝茶入 銘 四聖坊(師匠坊肩衝)」(出光美術館蔵)はいずれも唐物の名物である。この3点と並んで飾られたという「上々瀬戸肩衝」も、「大嶋」であれば納得がいく。また『松屋会記』に日付はないが、『桜山一有筆記』にはほぼ同じ記述があり、元和5年9月23日の昼としている。先述の仮説の通りとすれば、大坂夏の陣から4年の間に、「大嶋」が高虎の下に納まっていたことになる。

なお、本作の内箱蓋表にある「大嶋肩衝」の墨書(挿図4)は、小堀遠州の筆と伝わる。そして『大正名器鑑』には、総箱の裏の色紙に次の書付があったという情報がある。

大島肩衝／箱書付 小堀遠州筆

藤堂和泉守／遺物

現在この総箱は付属しておらず、色紙も確認できな

いが、遠州は高虎の養女を正室としており、名物裂の袋(挿図6)や牙蓋(挿図7)やなどを遠州が整えた可能性は想定してよい。ただし現在付属している桐材の内箱、黒漆蠟色塗り金粉字の外箱(挿図5)の作りは、遠山記念館で所蔵する「文琳茶入 銘 玉垣」と、几帳面の取り方や金具など、ほぼ同じ仕様である。両者は將軍家で所持した「柳営御物」という来歴が共通するため、元禄年間以降に將軍家で整えたものと見るべきだろう。このため内箱墨書が遠州という可能性はなく、遠州の筆は挽家(挿図8)の蓋表の粉字形なのかもしれない。

その後、「大嶋」は幕末の混乱期にも徳川宗家に伝わり、大正7年(1918)には『大正名器鑑』編纂中の高橋義雄が閲覧している。

実見記

大正七年十一月八日、東京府下千駄ヶ谷徳川家達邸に於て実見す。口作拵り返し浅く、甌下張り、大形の割合に口締り肩張りて、甌と肩との間少しく落込みたるは、殆んど人間の肩を見るが如し、総體柿地に黒釉掛りて光澤麗はしく、置形の邊別して鶉斑多し(中略)兎角其形の大なるが目触りと為らず豊麗圓滿の氣象あるは、愈々其妙作たるを知る可なり。

また本作には譲渡証(挿図9)が付属しており、戦時下の昭和18年(1943)に徳川宗家を離れたことが確認できる。ただし宛名が切り取られているため、譲渡先は不明である。そして戦後の昭和31年になり、遠山元一が入手した。



挿図4 内箱蓋表(左「大嶋」、右「玉垣」)



挿図5 外箱蓋表(左「大嶋」、右「玉垣」)

・大瀬戸茶入の評価

最後に大瀬戸の茶入の評価について私見を述べたい。大瀬戸は天正年間から文禄年間にかけて登場してきた瀬戸茶入であり、その来歴に登場するのは秀吉周辺の人物ばかりである。その金銭的価値も高く、現在の茶道具の相場をはるかに超える、まさに一領地の年間の石高のような値であった。想像を逞しくすれば、秀吉政権の周辺で、褒賞の代わりに制作された、特注品であったとも考えられる。

その後も大瀬戸は、江戸時代を通じて高い評価を受け、将軍家を始めとする名家に秘蔵されていた。瀬戸茶入の体系化を進めた松平不味は、「生駒」、「平野」、「山の井」などを「大名物」に、「槍の鞘」はその上の「宝物」とし、小堀遠州が選定した「中興名物」よりも上位に置いている。また幕末期に茶道具の蒐集に熱を入れていた若狭国小浜藩(福井県小浜市)の酒井忠義(1813～1873)も大瀬戸に執心し、六角三井家の所持していた「生駒」、そして茶屋四郎次郎家の所持していた「長谷川」の2点を入手することに成功した。

長谷川肩衝は大瀬戸茶入三つの内にて、第二番の品
大瀬戸茶入三つの内は生駒、長谷川、今一つは
平野とも平手とも申候由。(後略)

これは忠義周辺による添状であるが、中興名物に比して稀少な大瀬戸は、おいそれとは拝見できない作品だっただろう。

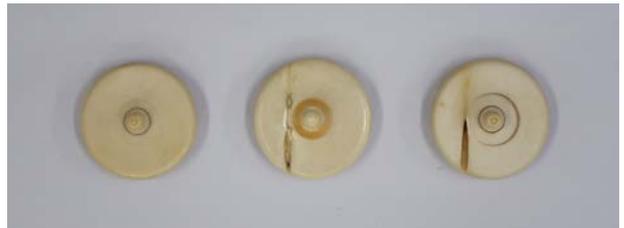
しかし昭和期に茶道史が編纂される過程では、遠州による中興名物の選定作業が高く評価され、大瀬戸はその陰に埋没していったように見える。また大瀬戸があまり美術館等に納まらなかったため、展覧会や研究を通じた顕彰の機会を失った面もあるだろう。あるいは大瀬戸こそ、桃山茶陶を代表する存在なのではないだろうか。

主要参考文献

- 『寛政重脩諸家譜 第一輯』 栄進舎出版部、1917
- 高橋義雄『大正名器鑑第3編』 大正名器鑑編纂所、1922
- 『茶道古典全集9』 淡交社、1957
- 大嶋義昭『大嶋一族』 大嶋義昭、1975
- 『茶道古美術 蔵帳集成 上巻』 国書刊行会、1977
- 『美濃市史 通史偏上』 美濃市、1979
- 中川和明「豊臣政権の城普請・城作事について」
『弘前大学国史研究』85、1988
- 『続石井至毅著作集』 東京都世田谷区教育委員会、1992
- 『新修関市史 通史編』 関市、1999
- 井上喜久男「瀬戸茶入の制作年代」
『野村美術館研究紀要』13、2004



挿図6 袋(藤言金欄、木下金欄、宗雪銀欄)



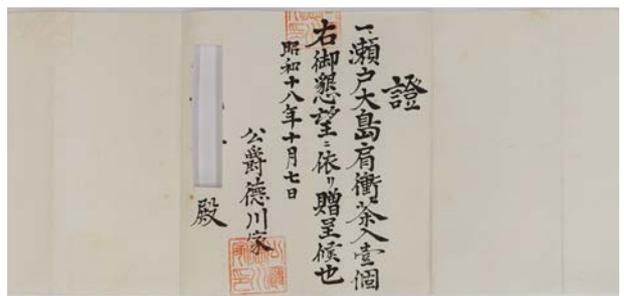
挿図7 牙蓋



挿図8 挽家



挽家蓋表金粉字



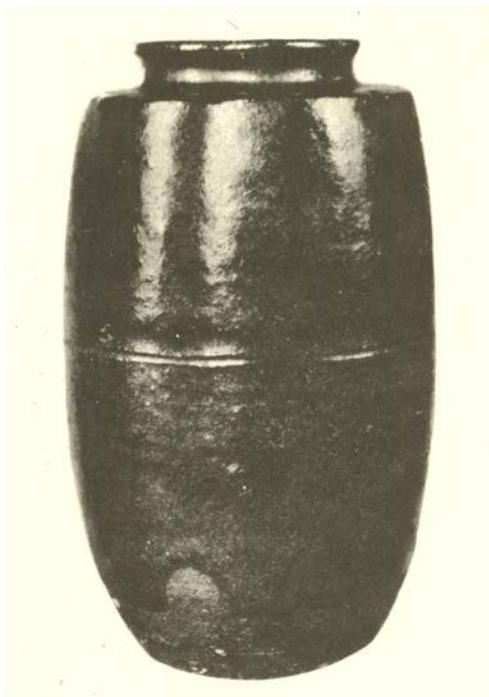
挿図9 譲渡証



挿図10 「肩衝茶入 銘 茶屋」(『大正名器鑑』より転載)
高12.3m 口径3.0cm 胴径7.3m 底径4.2cm



挿図11 「肩衝茶入 銘 本阿弥」(『大正名器鑑』より転載)
高11.7m 口径4.2cm 胴径7.2m 底径4.8cm



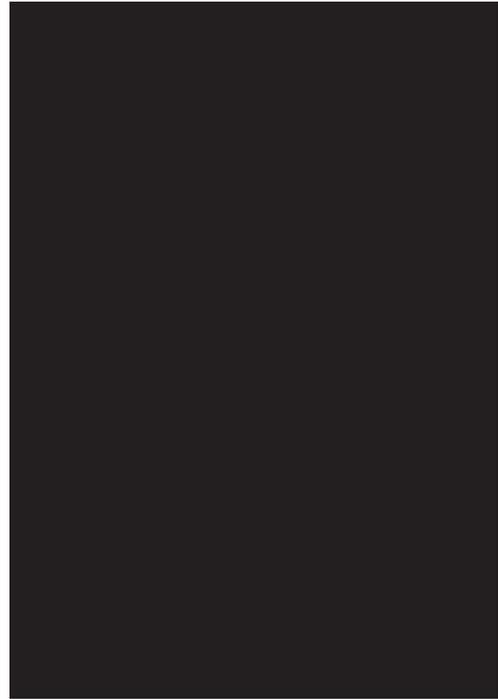
挿図12 「肩衝茶入 銘 松前」(『大正名器鑑』より転載)
高11.4m 口径4.2cm 胴径6.9m 底径4.0cm



挿図13 「肩衝茶入 銘 槍の鞘」(『大正名器鑑』より転載)
高9.3m 口径3.3cm 胴径5.9cm 底径4.5cm



挿図14 「肩衝茶入 銘 長谷川」(『大正名器鑑』より転載)
高12.3m 口径3.4cm 胴径7.3m 底径4.2cm



挿図15 「肩衝茶入 銘 平野」(『大正名器鑑』より転載)
高12.1m 口径3.3cm 胴径7.3m 底径4.5cm
畠山記念館蔵



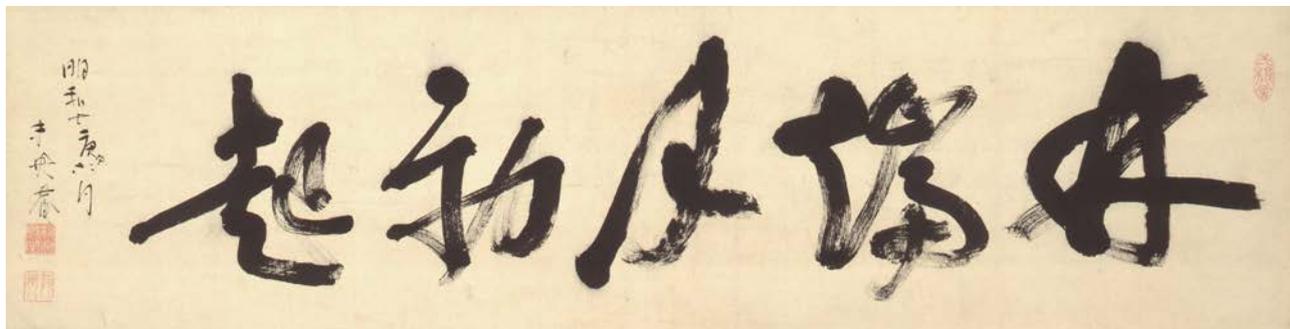
挿図16 「肩衝茶入 銘 生駒」(『大正名器鑑』より転載)
高11.9cm 口径3.9cm 胴径7.3cm 底径4.4cm
MIHOミュージアム蔵



挿図17 「肩衝茶入 銘 山の井」(『大正名器鑑』より転載)
高11.2m 口径3.7cm 胴径6.7m 底径3.4cm

松平不昧筆 横物「林端月初起」の 出典と制作背景について

久保木彰一



明和7年(1770)6月 28.0×107.5cm

本作品は、出雲国松江藩主で大名茶人として名高い松平治郷(不昧・1751～1818)の筆跡で、左端「明和七庚寅六月 未央菴」の落款によって、20歳の手と知る。不昧の青年期の書は数少ないため、貴重な一幅である。

禅僧が墨蹟を書く時に使う、穂先の擦り切れた禿筆で、筆勢ゆたかに揮毫する。幼少武家の手習いは和様の御家流だが、不昧は7歳から唐様の大家 細井広沢の息子九皐(1711～1782)に書道を習う。ただ本作は唐様風とは言えない。

また、19歳から江戸麻布の天真寺九世 大巖宗碩(1629～1685)について参禅修行を始めていて、本作の書風にはむしろ、禅僧の墨蹟が醸し出す、力を抑えた枯淡に近い風趣が現れている。入門して間もないにもかかわらず、禅の教えを学ぶかたわら、大巖和尚の墨蹟に接してその影響を受け、自らの書作にもそうした雰囲気を出せないものかと試みた書であったかも知れない。

さて、書かれた五言は、「林端 月初 起く」と仮に読んで、禅語辞典をくまなく調べ、また、自然の情景を詠じた句と思われるので唐宋などの名詩なども当たったが、出典が見つからない。これまで、元の詩は残念ながら不明としてきた。

ところが数か月前に、中国のWeb上で漢詩データベースの語句検索ができるサイトを見つけた。五言の検索をすると、明時代の文人 王世貞(1526～1590)の五言絶句

王世貞 撰『弇州四部稿』卷45

詩部 五言絶句185首のうち(四庫全書本)

飲華生茗

「君携陽羨茶 薦以中冷水 高臥讀離騷 林端月初起」

の詩句であることがわかった。

「林端月初起」は五言絶句の四句目で、林の外れから月が起きるといふ眼前の景観を描写した、いわゆる叙景詩の一節ではなくて、茶を飲んで友と過ごしたり、ゆったりとした気分で本を読むのと併せて、月の風情も楽しむ、と詠じた詩の部分であろうと想像した。しかしながら、漢文の解説については、詳しい方から以下をご教示していただいた。

(書き下し文)

華生茗を飲む
君陽羨の茶を携ふ
薦むるに中冷の水を以てす
高臥して離騷を読み
林端に月初めて起る

(現代語訳)

華生茗(茶)を飲む
君は陽羨の名茶を携えてやってきた
(そこで私は茶を入れるのに)中冷泉の水を薦める
(さし上げる)
俗世間を離れ、隠居して「離騷」を読み
(そうしているうちに)林のはずれにちょうど月が出てきた(夜になってしまった)

(語註)

- ・「離騷」は、楚の屈原の長編詩『楚辞』の首編。
- ・初は、今しも～したばかりの意。

清しい詩の内容が伝わる解釈を読むと、この詩から受ける印象は、本作を書いた不昧も同じように感じていたに違いないと思われてくる。

これまで筆者は、三日月を意味する月初が起きるとは、夕方に見えはじめる三日月の傾きが、春の寝た形から夏に向かって少しずつ起きてきて、秋には立ち上がった姿に変わる。その傾きの変化を起こると詠じたのかと、無理な解釈をしていた。

作者の王世貞が名茶を味わった後、有名な「離騷」の詩を読んでいたら、いつの間にか戸外の林から月が出てくる夜になってしまった、というように理解すると、これは、人里離れた清楚な草庵ちかくの樹林の上に月が昇ってくる水墨画(書斎図)のイメージそのままではないか。上部にこの詩が賛として書かれている詩画軸を想像するのも、よろしかろう。

さて、不昧が「林端月初起」の詩句を選び出した原本が自らの蔵書か、松江藩の文庫収蔵本であったかは知れない。出典の『弇州四部稿』(賦、詩、文、説の四部)に収まる「文」については、江戸幕府の儒者 林羅山の蔵書目録にあることから、慶長9年(1604)までに日本へ伝わっていた。その後、儒者 荻生徂徠(1666~1728)もこの王世貞の文芸思想を学び、古文辞学を確立して、幕府に対して政治的助言もできる勢力になる。高弟の服部南郭(1683~1759)の蔵書にもこの『弇州四部稿』が含まれ、現存している。そして、松江藩主に講義を行う侍講として、徂徠門下の宇佐美瀧水(1710~1776)が不昧の生まれる前から出仕して、世子の教育も受け持っていたという。

ついでに、下総関宿藩士の池田正樹は『難波嘶』という随筆(『随筆百花苑』14収録)に、藩主の大坂城代赴任に従って大坂滞在中に、著名な文人 木村兼葭堂などとの面談や噂話を書き留めた。その中に城内の名水 黄金水の味を忘れないためにと、王世貞のこの五言絶句をそのまま書き写している。明和9年から記録した巻にあたり、同じ時期の資料である。

このように、不昧がこの詩に出合える状況が見えてきた。『弇州四部稿』に収録される種々の五言絶句185首からこの詩を揮毫対象に抽出し、さらに4句目の五言だけを横長の料紙に書くことに決める。一体その選定理由は何であったのか、どこが気に入ったのであろうか。

そして、本作の落款による明和7年(1770)6月に、不昧が筆を取った場所は、当然、赤坂御門内にあった松江藩上屋敷の居室においてかと思ったら違っていた。この時不昧は、国元の松江にいたのである。

明和4年(17歳)	12月7日父の隠居により家督を継ぐ
5年(18歳)	この年石州流茶道を学ぶ
6年(19歳)	この年より大巖和尚に禅を学ぶ
10月22日	江戸を出発
11月13日	新藩主として初めて入国する
7年 6月	「林端月初起」を執筆する
8月13日	松江を発して、10月4日江戸に着く

若殿様として華々しくお国入りを遂げ、江戸での気苦労の多い公務と、嵌めも外せない堅苦しい生活ともしばらくは離れることができるはずであった。ところが、当時の藩の財政は破綻していたため、それから家老とともに藩政改革に十数年を掛けることになる。

明和7年の不昧は、正月の儀式饗宴などを済ませ、2月は歴代の祖廟を拜謁、3月は各武術の御前試合を観戦、4月には国内の巡視、6月は砲術演習の視察が予定されていて、それに日々の四書五経の読書、武道の稽古まで入れれば、国元でもほとんど休みのない毎日であったろう。寛げるのは茶の湯と、書道であったかも知れない。この時の不昧を仮想してみよう。

秋に江戸へ戻ったら、なるべく早く大巖和尚を訪ねて禅の修業を続けたい。師から示された公案を解く看話禅は簡単には進まないが、心を落ち着けて思いをめぐらすことはいい。何よりも、和尚の墨蹟は深みがあって魅力的であったな。久しぶりに何か書いてみたい気がする。

書は和尚に倣ってみよう。書くのは宇佐美講師から教わった王世貞の飲茶の詩がいい。茶話の初句、2句から転換した後半、風月の五文字にしてみよう。禅語のように自然の真理を託すような言葉ではないが、一時の変化の中に永遠の安らぎを込めたい。

夕べ眺めた三日月は、張りのある綺麗な形であった。西戌(西北西)の朝日山の方へ左下から入っていっただろう。月が起こると詠んだ世貞詩の月は三日月ではない。日没後に東の空に出てきてずっと天を西へ移っていく満月ではなかったか。

とは言え、月の漢字は三日月の象形だから、五文字の中央に書く月の字は、字源に近い姿で書こう。三日月は新月の後に最初に見える月。物事の始まりの意もあるから、初国入りの覚えとして執筆するとしてよう。

ところでこれまで各地の美術館において、不昧と茶の湯をテーマとした展覧会はいく度も開催されてきた。その中で不昧の一行書などの遺墨を多く出品した田部美

術館『不昧公展』(2001年)の図録を参照し、執筆年の判明する作品と、不昧の多彩な書風変遷を探ってみた。

① 一行書「寛心應是酒・遣興莫過詩」双幅

(上掲図録図版4)

収納箱蓋裏に明和2年10月19日 不昧15歳
杜甫晩年の「可惜」(惜しむ可し)という詩の二句を、
細井九臯伝授の唐様で書く。早筆で若々しいその書き振りに、15歳の青年不昧の詩解釈が見てとれる。なお、別の典拠によれば、島根県立博物館には九歳年紀のある唐様の「對月二字」が所蔵されるという。

② 「柳に鳩図」(同上図版5)

落款に「明和七年庚寅夏日 斗門画」20歳
斗門は、青年時の号。水墨画の輪郭線を使わない付け立て技法で古株に止まる鳩を描く。落款年号の明和7年は、本作「林端月初起」と同じ年月になる。書画を1幅ずつ、創作意欲が高揚した時期であったに違いない。

③ 一行書「清波無透路」(図版8)

収納箱蓋裏に「天明二壬寅正月吉辰」32歳
『雲門広録』上にある五言。清波は水、透路は月で、行けども行けども清波で、突き抜ける手立てがないこと。筆勢の充実した唐様の書である。

④ 公案「趙州柏樹子」(図版15)

落款に「天明三卯臘月 不昧應求書」33歳
『趙州録』他にも収録される公案。達磨が中国にきた理由はとの問いに、庭先の柏樹と答え、目の前の卑近なものにこそ仏法はありと示した。不昧には別に、文末の五文字だけの一行書も残る。

①と③は贈られた者が記念に、収納箱蓋裏に年紀を記したもの。一方、②、④と本作を加えた3点が、不昧自ら作品の紙面左端に、執筆時期のある落款を加えた例である。稀な存在の3点に、年紀を入れた詳しい経緯が記されていないのは残念である。

続いて、大多数の無年紀の作品を見ていこう。不昧の書は、生涯変わらぬ一流風で書き続けられたのではなく、多様な変化のある書風を見せている。

先述した①～③・④の通り10歳代から30歳代半ばにかけて、唐様書風で漢詩が書かれた。穂先を線の中に隠して筆線の両端が丸みを帯びる蔵鋒書体の一行書が主で、①のように筆先を尖ったように横画の左斜

上を通して書き、シャープで軽やかに見せる露鋒作品も数は少ないが残っている。ほとんどが行草体の単体で書いており、希に連綿書きを入れたものもある。そして、不昧の遺墨全体を通して見ると、この唐様作品の中に覇気と変化のある作品が多く魅力的な書と思われる。

この基軸となる書風から派生したとは言えないが、運筆を遅めに太い線で筆圧の変化をつけて、藤原定家の書風・定家様と同じく水平扁平の単体蔵鋒の漢字で書かれる作品が出てくる。内容は『無門関』『碧巖録』などから引かれた公案の禪の語句で、禅僧が書く墨蹟から影響を受けた書風なのであろう。それに加えて、達磨大師の名号や千手観音の無量智慧を表す語句などを書いたものもあり、いずれも、仏教関係の内容になる。

そして、弟衍親あての25歳の書状(田部美術館蔵)に早くも定家様がみられ、30歳代半ばから茶道に情熱をそそぐようになると、定家様で賛を加えた達磨画や牡丹自画賛、また隸書の語句や漢字一文字を書いた作品が登場する。いずれも、茶人不昧としての名声が高くなって、茶人仲間や交流ある人々からの頻繁な揮毫依頼に応じた作品である。

年齢とともに書のスタイルを変えていったように思われるが、執筆する内容にふさわしいと思う書風でそれぞれを書き分けていた傾向も見取れる。

室町末期の16世紀後半に藤原定家筆と伝わる小倉色紙が茶会の床飾りとして尊重され、小倉色紙以外の定家の筆跡も求められていったことが『宗及茶湯日記』などによって知られる。そして江戸初期の大名茶人小堀遠州の茶の湯では、従来の名物茶道具とは別に、新たな道具が選ばれ、和歌や物語にちなんだ銘がつけられた。遠州は定家子孫の冷泉家に和歌を学び、茶道具の箱書きに自ら定家様で歌銘を加えた。扁平で単体の定家様は流麗典雅な仮名ではないが、明瞭な形姿である。茶掛の第一とされた墨蹟が、禅の境地を表せば、書の規範にこだわらなかったのと似た流儀であったろうか。こうして、遠州の茶友、門下に定家様の書が、茶道にふさわしい書体と認識されていった。

それから150年ほど後に、大名茶人として活躍したのが松平不昧である。先人遠州への敬慕の念は篤く、遠州が選んだ名物を中興名物と呼び、自分の好みのものを雲州名物として追加して、『古今名物類聚』にまとめた。茶道具の箱書きも遠州に倣って、手慣れた定家様と隸書で書いている。

遠州所持の高麗茶碗を不昧が手に入れ、現在は「堅手茶碗 銘 長崎」(重文)の名称で根津美術館に所蔵

され、両人の愛玩を経た名物道具を収蔵する美術館は数館存在する。そして、遠州周辺の人物が著したと推される、定家様を書くための9つの奥義を記す『定家卿筆道』の遠州写本が、東京国立博物館に伝わっている。偽書説も出てはいるが、不昧がそれを入手して、定家様を学習したことは間違いないであろう。

以上、不昧が定家様を身に着けるようになったのは、必ずしも歌聖として藤原定家を尊崇したからではなかったようである。

では、もう一度、本作を見てみよう。五文字中央の月の草書が、右に傾ぐ形でおかしいと感じるかもしれないが、字典をみれば王羲之に似た文字があるので、不昧の真面目な稽古がうかがえる。月の字3-4画の勾玉にも見える連続画が、文字の平衡を保っていて、また、1字目の林の字は、偏と旁の木の字縦線を平行に引くはずが、上がくっついて三角形をつくっている。そのため林の字は月の字と相似して見える。さらに林の最終画の右払い（ここでは止め）に呼応するように、左端の起の字3画目の横線が蔵鋒で書かれている。勢いよく墨かすれも爽やかな印象を本作から受けるとともに、縦書きの一行書にはない、見事な横書きの空間構成を見て取ることができる。

月の字が三日月を意識して書かれたかは確証がないものの、左端の「明和七年庚寅六月未央菴」の落款中にある月と明の2文字と比較すれば、その斜体に特別な意識が働いたとしてもおかしくない気がする。

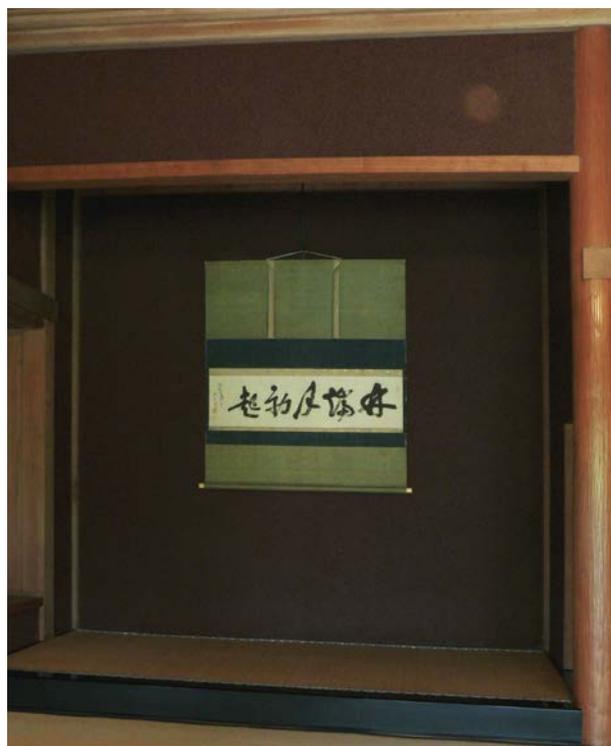
落款の下に捺されている印章は「松江城主」白文方印と「治郷」の朱文方印、また右上端には「式推舎」朱文楕円形関防印がある。

最後に、掛け軸に仕立てられている本作を取める杉の軸箱について触れる。時代焼けする箱蓋表に「御筆物 拝領谷口民之丞」と墨書される。不昧が明和5年18歳で正式に石州流茶道を伊佐幸琢について習う以前、茶の湯の手ほどきを受けた5人の中の1人に、この谷口民之丞の名がある。千家流の茶人で、京都から呼んで江戸の藩邸でその点前を見たと言われるが、それ以上のことは不明。明和7年10月に江戸へ戻った不昧が、折を見てそれまでの恩に報いるために贈ったものであった。

追記

Webで王世貞を調べている際に知ったことを、紹介しておこう。昨年10月から今年の3月まで、台湾の国立故宫博物院において、「寫盡繁華-晚明文化人王世

貞與他的志業」(世の繁栄を書き尽くす-明代晩期の文化人王世貞とその志業)と題した展覧会が開催されていた。国宝8点を含む500点を越える2期にわたっての特別展。「近年、学術界では王世貞に関する研究が盛んに行われています。…王世貞が如何にして天賦の才と文化的素養の優位性、歴史家特有の広い視野を生かして後世に影響を与えた多数の論述を残し、積極的に様々な芸術文化活動を主導しながら、一つの時代を表す文化像を形成したのかをご覧ください」(国立故宫博物院ホームページ・展示概要より)という内容であった。王世貞の著作、書跡、王家のコレクションが一堂に出品され、『弇州四部稿』も含まれていた。



遠山邸中棟大広間の床の間に掛けた本作。間口1間半、奥行4尺5寸の広い空間に程よく収まっている。床前から座って見ると、かなり高めだが、展示ケース内で水平に近い目線で見るとは、作品の趣が違っているように感じられる。先に枯淡の趣と述べたが、文字の隅々まで力がコントロールされていて心地良い不昧の書は、まさに無駄のないシンプルで格式ある床の間の室礼とぴったりで、よく馴染んでいるのである。仰ぎ見るその視線は、大切でありがたいものに相対する時の恰好に重なるだろう。

本紙の横幅は107.5cm、表装の中廻しを入れると117.5cmの大きさで、小間の茶室の床には窮屈である。飲茶の漢詩の句であったが、不昧が茶掛けとして執筆したものとは思われない。晩年の需に応じて書いた自画賛や隸書字号などは違って、自己の書のスタイルを真剣に探り求めていた作品と考えたい。

ルーチョ・フォンターナ 《空間概念 自然》 館蔵品紹介の追記・訂正

東北学院大学 巖谷陸月

前号に掲載されたルーチョ・フォンターナ《空間概念 自然》の館蔵品紹介について、いくつかの追記と訂正をしたい。

まず、本作は、2006年までに出版されたフォンターナのカタログ・レゾネにおいて、(59-60 N27)の分類番号とともに掲載されていた。前号の報告は、文献収集上の時間的な制約から1974年、1986年、2006年のレゾネに基づいて分析をおこなったため、この番号の項目の記載情報に基づいている¹。

しかし、2022年11月に新たに出版されたセラミック作品を扱うカタログ・レゾネにおいて、本作の分類番号は(59-60 N21)に変更された²。これは、前号で(59-60 N27)と混同されている可能性がある³と指摘した分類番号であり、今回の変更によって、遠山記念館所蔵作は《空間概念 自然》(59-60 N21)として再度、正しい形で登録された。ただし、本作の日本国内での出展記録については、依然として1992年の「ルーチョ・フォンターナ展 切り開かれた空間」展が最初のものでされているため、今後、1979年の「近代イタリア美術と日本 作家の交流をめぐって」展における展示履歴の追加が期待される³。

また、記念館の遠山公一理事長よりお話をうかがう機会を得たことで、本作の来歴について明らかになったことがあるため、ここに記しておく。

記念館に寄贈された本作は、遠山一行前理事長が、1970年に建築家の吉村順三(Junzo Yoshimura, 1908-1997)に依頼して建設したご自宅の庭に、建設当初から設置されていたという⁴。本作が、吉村による遠山邸の建築デザインの一環として想定されていたかについては不明だが、その可能性は十分にあると考えられる。以上により、本作はすでに1970年には国内に入っていたと確認された。このことから、前号で推測した本作が本邦に渡るまでの経路のうち、「1977年における自由が丘画廊を通しての輸入」は否定され、国内で最も早い1962年10月にフォンターナの個展を開催した、東京画廊を通じて日本に入った可能性が高いと見られる。

前号で述べた通り、東京画廊は、1966年の夏にヴェネツィアのカヴァリーノIIで開催された「日本のモダン・アート」展に協力していた⁵。そして、この会期中には同じ系列のカヴァリーノ画廊で「カポグロッシ」展と「フォンターナ」展が立て続けに開催されており、このうち前者では、同じく遠山記念館に収蔵された《表面 579》の出品が確認されている⁶。以上を踏まえれば、東京画廊は、この時期以降にカヴァリーノ画廊を通じてカポグロッシ(Giuseppe Capogrossi, 1900-1972)の《表面 579》とともにフォンターナの《空間概念 自然》(59-60 N21)を入手したのではないかと推測できる。前理事長は東京画廊と懇意であったとのことなので、本作はおそらく、この画廊を通じて遠山家に入ったものと見てよいだろう。

ヴェネツィアのカヴァリーノ画廊、およびカヴァリーノIIを

開いたカルロ・カルダッツォ(Carlo Cardazzo, 1908-1963)は、空間主義運動の本拠となったミラノのナヴィリオ画廊の主で、運動の発起人に名も連ねた人物である⁷。美術批評家で詩人の瀧口修造(Shuzo Takiguchi, 1903-1979)がミラノでフォンターナのアトリエを訪れる際の仲介を務めたのも、このカルダッツォであった。1958年の第29回ヴェネツィア・ビエンナーレにおいて日本代表および審査員を務めた瀧口は、この国際美術展の設営の場でフォンターナと親交を結んだことをきっかけに、公務後の旅路で彼のアトリエを訪問している⁸。この出会いはのちに、フォンターナの日本における最初のモノグラフィの出版へと結実し、1960年代以降に本邦でこの芸術家の作品が広く紹介される緒となった⁹。1966年に東京画廊が協力したカヴァリーノIIでの展覧会にも、同年の第33回ヴェネツィア・ビエンナーレ関係者が多く携わっていたことを思えば、本作が日本へたどりつくまでの道筋は、この国際芸術展によって形成された日伊間のコネクションに支えられたものと言えるだろう¹⁰。

¹ Crispolti, Enrico(rédigé), *Lucio Fontana: Catalogue raisonné des peintures, sculptures et éléments spatiaux*, vol.2, Bruxelles: La Connaissance, c1974; Crispolti, Enrico(a cura di), *Lucio Fontana: Catalogo generale*, Milano: Electa, 1986; Crispolti, Enrico(con la collaborazione di Nini Ardemagni Laurini, Valeria Ernesti), *Lucio Fontana: Catalogo ragionato di sculture, dipinti, ambientazioni*, Milano: Skira, 2006.

² 遠山公一理事長のご尽力により、この新たなレゾネには、「かつて誤って59-60 N27のリストに記されていた」ことを示す、“già erroneamente in Note di 59-60 N27”の但書きとともに、59-60 N21の項目に本作が掲載されている。Barbero, Luca Massimo(con la collaborazione di Silvia Ardemagni, Maria Villa), *Lucio Fontana: catalogo ragionato delle sculture ceramiche*, Milano: Skira, 2023, p.617.

³ これまでのどのレゾネでも、本作の日本における出展記録は「ルーチョ・フォンターナ展 切り開かれた空間」(1992年4月4日～26日 東京・三越美術館【新宿】 / 7月17日～8月23日 鹿児島市立美術館 / 10月24日～11月23日 西宮市大谷記念美術館)のみ記載されている。実際には、これ以前に「近代イタリア美術と日本 作家の交流をめぐって」(1979年10月6日～12月2日 大阪・国立国際美術館)で展示されていた。

⁴ この遠山邸は、吉村の作品集に「筈町の家」として掲載されている。吉村順三『吉村順三作品集』新建築社、1978年、64-67頁。

⁵ *Modern Art of Japan*, Venezia: Cavallino II, 15 giu.-15 lug., 1966.

⁶ 後者のフォンターナ展における《空間概念 自然》シリーズの出品については、本稿掲載後にヴェネツィアにおいて確認の予定。この展覧会に《空間概念 自然》(59-60 N21)が出品されていた場合、これが本作にあたる可能性は高い。Capogrossi, Venezia: Galleria del Cavallino, 14-30 giu., 1966; Fontana, Venezia: Galleria del Cavallino, 1-29 lug., 1966.

⁷ Bianchi, Giovanni ed., “Appunti per una cronologia”, *Carlo Cardazzo: Una nuova visione dell'arte*, Exh. cat. Venezia: Collezione Peggy Guggenheim, Luca Massimo Barbero ed., 2008, pp.20-23; Marangon, Dino, “Manifesti dello Spazialismo”, *Fontana e lo Spazialismo*, Exh. cat. Lugano: Villa Malpensata, 1987, pp.71-87.

⁸ 滝口修造「フォンターナ訪問記」『三彩』第113号、1959年4月、30頁。註7、8ともに、姓名の表記は出版時のものに倣った。

⁹ 滝口修造『フォンターナ』(現代美術 25) みすず書房、1964年。

¹⁰ 序文の署名には第33回ビエンナーレの日本代表コミッショナーを務めた久保貞次郎の名前がある。また、委員として日伊のビエンナーレ関係者の名が並び、そのなかに画家としてカポグロッシ、彫刻家としてフォンターナの名もあった。*Modern Art of Japan*, Exh. cat. Venezia: Cavallino 2, 1966, n.pag.

特別展「瀬戸焼と美濃焼」

9月16日(土)~11月19日(日)

愛知県の瀬戸焼は、古くより日本の陶器技術を牽引する役割を果たしてきました。特に瀬戸窯を特徴付けるのは中国陶磁器を手本とした制作であり、茶の湯の発展と歩調を合わせ独特の美しさを持つ作品を生み出してきました。また16世紀には瀬戸の陶工たちが岐阜県の南東部に移住し、その作品は美濃焼と呼ばれています。美濃焼が生み出した新機軸の作品は、後に黄瀬戸、志野、織部などと呼ばれ、日本の陶芸に大きな影響を与えています。本展では遠山記念館の瀬戸焼、美濃焼を一堂に会してならべ、この時期の陶磁器の展開を追って紹介いたします。



「丸水指」瀬戸
永正18年(1521)銘



「瓢箪茶入 銘 閏」瀬戸
桃山~江戸時代初期 16~17世紀



「織部四方蓋物」美濃
桃山~江戸時代初期 17世紀



「志野宝珠香合 銘 尾上」美濃
桃山~江戸時代初期 16~17世紀

「瀬戸焼と美濃焼」関連イベント

土曜講座「瀬戸焼と美濃焼の茶道具」

10月7日(土) 午後1:30~3:00

- 講師：依田 徹 (当館学芸課長)
- 会場：遠山記念館事務棟大会議室
- 参加費：500円(入館料別途)
- 定員：30名様(先着順、Zoom参加可能)

特別鑑賞会「長次郎の黒楽茶碗を見比べる」

10月15日(日) ①午前11:00~12:00

②午後1:30~2:30

- 講師：依田 徹 (当館学芸課長)
- 会場：遠山邸中棟2階数寄屋座敷
- 参加費：10,000円(入館料別途)
- 定員：各回とも10名様
(抽選、10月8日申込締切、友の会優先)

記念茶会

10月21日(土)

①午前11:00~ ②午前11:40~ ③午後1:00~
④午後1:40~ ⑤午後2:20~ ⑥午後3:00~

- 協力：埼玉大学茶道研究会
- 会場：遠山邸中棟2階数寄屋座敷
- 参加費：1,000円(入館料別途)
- 定員：各回とも20名様(先着順)

お申込み用アドレス：tkkk@e-kinenkan.com

上記アドレスにメールで「希望するイベント名、お名前、電話番号、鑑賞会と記念茶会はご希望の時間」をお知らせください。折り返し当館からメールをお送りします。
(申込受付：9月16日~)

「コレクション展2」

12月2日(土)～2024年1月21日(日)

年末から年始にかけて遠山記念館の所蔵品の中から、吉田芳明「龍」をはじめとする来年の干支である龍にちなんだ作品、また正月をお祝いするのにふさわしい絵画や工芸作品を選んで展示いたします。



竹内栖鳳 「千代田城」
昭和15年(1940)



雲龍模様羽織
江戸時代後期～明治時代 19世紀



吉田芳明 「龍」
明治～大正時代 19～20世紀

「雛の世界」

2月3日(土)～3月10日(日)

江戸時代に開花した人形文化は、日本独自の雛人形を母体として、多種多様な人形を生み出してきました。本展では、雛人形を中心に江戸時代中期から昭和時代中期頃までの様々な種類の人形を展示し、日本の人形の歴史をたどっていきます。高さが60cm以上もある大型で豪華な「享保雛」をはじめ、丸顔で愛らしい「次郎左衛門雛（立雛）」、江戸っ子に人気を博し、現代の雛人形のもととなった「古今雛」、高さが2～3cm程の「芥子雛」、明治天皇、皇后、儀仗兵、女官を表した「明治天皇御影雛」などの変わり雛の他、近代の名工と呼ばれる作家たちの雛人形などを出品いたします。他にも嵯峨人形、御所人形、衣裳人形、賀茂人形、からくり人形、抱き人形、また厄除けや病除けなど健康を願って作られた各地の郷土人形も展示します。併せて、遠山邸の大広間では、十畳の座敷いっぱい飾られた「遠山家の雛壇飾り」もご覧いただけます。日本の人形が持つ魅力をご堪能ください。

「雛の世界」関連イベント

「雛祭りの日」ガイドツアー

3月2日(土)、3月3日(日) 午後1:30～3:00

- 会場：美術館・遠山邸 ●参加費：無料(入館料別途)
- 受付：当日午後1時30分に美術館ロビーに集合。担当学芸員が「雛の世界」展と「遠山邸」を解説します。



「遠山家雛壇飾り(御殿飾り部分)」 大正時代 20世紀



「享保雛」 江戸時代中期～後期 20世紀



「立雛(次郎左衛門頭)」
江戸時代中期～後期 18～19世紀

これからの催し物

遠山邸研究会 第16回「遠山記念館(旧遠山家住宅)庭園の近代和風庭園としての特色と価値」

- 日 時：10月29日(日) 午後1:30～3:00
- 講 師：栗野 隆(東京農業大学教授)
- 会 場：遠山記念館事務棟大会議室
- 定 員：30名様(先着順、Zoom参加可能)
- 参加費：500円(入館料別途)

近代庭園史を専門とする栗野隆氏をお招きし、遠山邸(旧遠山家住宅)の庭園に関する初めての講演を行います。造営の経緯、全体の地割、細部の意匠、材料の特徴を確認しながら、同時代に作られた事例とも比較しつつ、近代和風庭園としての特徴と価値に迫ります。

お申込み用アドレス：tkkk@e-kinenkan.com

上記アドレスにメールで「希望するイベント名、お名前・電話番号・参加人数」をお知らせください。折り返し当館からメールをお送りします。(申込受付:9月16日～)



遠山邸2階公開日

- 日 時：9月23日(土)、11月18日(土)
午前11:00～午後3:00
- 参加費：無料(入館料別途)

2022年度 新収蔵品

つぎの作品及びコレクション等のご寄贈をいただきました。
心より感謝申し上げます、ご紹介いたします。

- ◇山本象成 様(岐阜県土岐市) 白志野茶碗 計1件
- ◇村山太郎 様(神奈川県横須賀市)
 - 1.白綾子地四季花に几帳模様打掛
 - 2.白麻地水辺に藤・桜・撫子模様帷子
 - 3.紫曙染縮緬地水辺に鷺・撫子・八重桜模様打掛(右写真)
 - 4.浅黄地鷗に帆掛け船模様刺繍掛下帯
 - 5.抽象花文様綴織剥ぎ合わせカシミアショール 計5件



2022年度 催事報告

- 4月29日(金・祝) 特別講座 (Zoom開催)「平治物語絵巻と合戦絵の系譜」
講師：土屋貴裕氏(東京国立博物館)
- 5月7日(土) 土曜講座 (Zoom開催)「頼朝の時代の文化と美術」
- 10月9日(日) 特別講座 (Zoom開催) 記念講演会
「江森天寿と石川梅子-好子がのこした物語」 講師：佐藤道信氏(東京藝術大学教授)
- 1月14日(土) オンラインギャラリートーク
- 2月18日(土) 地域子ども教室

●遠山家雛壇飾り

2024年2月3日(土)～3月10日(日)

雛祭りの季節に合わせ、遠山邸の大広間で十畳の座敷いっぱい飾られた雛壇飾りをご覧ください。これは遠山元一が、長女貞子(大正9年生まれ)の初節句の祝いとして揃えたもので、京都御所の紫宸殿風の館に人形を飾る「御殿飾り」と、関東風の「段飾り」との二組で構成されています。

「御殿飾り」は檜の樹皮で屋根を葺いた檜皮葺きで、すべて組み立て式になっており、また「段飾り」は七段で、特に五人囃子と隨身には日本橋十軒店の名工「永徳斎」の商標が付いています。



●ご来館のみなさまへ●

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、以下の点にご協力をお願いいたします。

- ・倦怠感、発熱、咳等の自覚症状のある方は、ご来館をお控えください。
- ・アルコール消毒にご協力をお願いします。
- ・館内では、会話を控えめにし、周囲の方と距離を保ってください。
- ・作品、展示ケース、壁や柱などにはお手を触れないでください。

利用案内

◇入館料

	一般	学生
特別展	1,000円	800円
通常	800円	600円
邸宅・庭園のみ公開	600円	400円

※中学生以下は無料、団体20名以上は2割引

◇開館 午前10:00～午後4:30(入館は午後4:00まで)

◇休館日 月曜日(月曜が祝日の場合は翌日)

12月21日(木)～2024年1月5日(金)

2月1日(木)～2月2日(金)、3月12日(火)

◇邸宅・庭園のみ公開(展示替期間)

11月21日(火)～12月1日(金)

2024年1月23日(火)～1月31日(水)

3月13日(水)～3月19日(火)

◇詳しい展覧会情報は下記をご覧ください。

URL <https://www.e-kinenkan.com>



電車・バスでのご来館の場合

- 東武東上線・JR埼京線 川越駅
 - 西武新宿線 本川越駅 ●JR高崎線 桶川駅
- いずれも「川越駅-桶川駅」間の東武バスで牛ヶ谷戸下車、徒歩15分

お車でのご来館の場合

- 圏央道川島ICより7分
- 川越方面から国道254号線の宮元町交差点を川島方面へ右折、釘無橋を渡り最初の信号を左折、案内板に従って約10分

遠山記念館だより 第65号 2023年9月発行

編集発行 公益財団法人 遠山記念館
編集担当 依田 徹

〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675
TEL:049-297-0007 FAX:049-297-6951